

15TH
Anniversary

開館15周年

花巻市
博物館

目次／P1 共同企画展「松川滋安と揆奮場」／P2-3 共同企画展「松川滋安と揆奮場」／P4-5 テーマ展「花巻人形 - 収蔵資料撰」／P6 活動レポート「発掘された日本列島 2019 ワークショップ」／P7 館長コラム・行事案内（12～3月）／P8 花博コレクション



だより

2019.12
No. 59

滋安が愛用した眼鏡

揆
奮
場松
川
滋
安
とJian MATSUKAWA
KIFUN-JYO

花巻市共同企画展 ぐるっと花巻再発見!～イーハトーブの先人たち～

江戸時代も終わりに近づいた安政2年（1855）、花巻に文武の学校が落成しました。当時の盛岡藩主であった南部利剛は、中国の古典『書経』にある「文教を揆り、武衛を奮う」という言葉を文武両道ととらえ、この学校を「揆奮場」と命名したと伝わっています。

花巻の地は、江戸時代を通じて南部領の南端に位置し、より江戸や仙台に近く、水陸交通の要衝であったことから、様々な情報や文化がいち早く流入する立地にありました。また、明治時代に至って鉄道が開通すると、瞬く間に近代化し発展を遂げていきます。このような背景の中で、花巻の人々は流入する情報や文化を積極的に取り入れていきました。特に学問や武道を修めることに対する意欲は、この頃、既に高まりを見せ、揆奮場の創設はその象徴でもあったのです。

令和最初の冬、寒さに負けず「松川^{じあん}滋安と揆奮場」展を皮切りに学びの旅に出かけてみませんか。

令和元年度 花巻市共同企画展

ぐるっと花巻・再発見! ~イーハトーブの先人たち~

まつかわ じあん きふんじょう 松川滋安と揆奮場

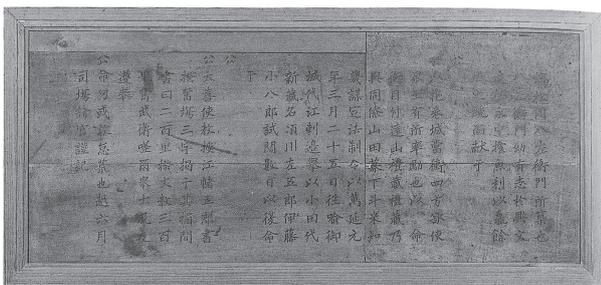
期間：令和元年12月7日(土)~令和2年1月26日(日)

藩校とは、江戸時代に諸侯が藩士の子弟を教育するために設立した学校のことを言います。また、郷学といって武士の子弟を教育させる小規模の藩校や庶民教育を行う学校もありました。

全国的には宝暦期(1751-64)ころから、藩政改革のための有能な人材を育成する目的で藩校が設立されています。しかし、盛岡藩で藩校がつくられたのは決して早いことではなく、天保11年(1840)に初めて藩立稽古場に校名を付して明義堂めいぎどうとしました。明義堂は幕末に至り作人館さくじんかんと名前を変えます。

江戸時代も終わりに近づいたころ、盛岡藩には、盛岡の作人館のほかに、遠野に郷学の信成堂しんせいどう(嘉永6年(1853)開設)がありましたが、盛岡藩第二の城下町であった花巻には私塾や寺子屋ばかりで藩校が設置されていませんでした。

花巻御給人の子弟が学問や武芸を身に着けるための学校がない状況を残念に思っていた松川しげやす滋安は、盛岡藩に学校設置の嘆願をします。全国的に見れば、武士の子弟教育のための教育機関は領主が設置するのが通常でした。しかし、花巻城内の財政は窮乏しており、学校設立の余裕はありませんでした。そこで、滋安は魚問屋の経営を支援し、費用をかき集めて文武の学校を設立したのです。



▲揆奮場掲額(個人蔵)

冒頭に「松川八左衛門の築く所なり」と書かれています。八左衛門とは滋安のことです。

安政2年(1855)に落成した学校が藩に認められ献納されたのは万延元年(1860)のことでした。

こうして、藩主・南部利剛としひさから命名された「揆奮場きふんじょう」は、明治5年(1872)に学制の発布と共に花巻郷学校などの変遷を経て、花城小学校ひいては花巻小学校の基礎となりました。

10年余りの短い期間とうりに、揆奮場では、菊池武安・佐藤昌介・小原忠次郎(東離)など、多くの子弟が学びの礎を築いていきました。揆奮場は、花巻の人々の文武教育の中心機関だったのです。

◆松川家の出自

松川家はもともと葛西清重の庶子を開祖とし、江刺領主江刺氏に仕えていました。しかし、葛西氏が滅亡し、江刺氏が南部氏の配下になると、慶長15年(1610)、盛岡藩2代藩主南部利直に召し抱えられ、花巻に来て南部氏に仕えることとなります。

◆花巻御給人としての松川家

花巻御給人とは、花巻城の御蔵から直接に禄(給与)を与えられたものをいいます。南部氏譜代の家臣ではなく、北信爰きたのぶちか(松斎しょうさい)・南部政直の家士などのほか、新たに採用された外様とごまの武士が多くいました。

花巻御給人としての松川家は100石の高知であり、初代は羽黒堂彦逸はぐるどうひこいつといい、当初は栃内村・笹間村(現花巻市栃内・同笹間)を知行し、後に稗貫郡滝田村・八重畑村(現花巻市石鳥谷町滝田・同八重畑)を拝領しました。

◆松川滋安という人物

松川滋安は、文化9年(1812)に松川家の8代目として生まれます。翌10年に父を亡くし、2歳

にして父の跡目を継ぎます。7歳の頃から難聴を患うなど、その生涯ははじめから波乱に満ちていました。しかし、母が教育熱心だったこともあり、幼い頃から勉学に取り組み、20歳の頃には先生と呼ばれるほどであったといえます。

そのころから教育に従事する日々を送りましたが、花巻に学校を設立したいという思いを強くし、人々の協力を得て学校を設立しました。

また、滋安は和歌の道にも秀でており、桂舎と号して多くの和歌を残しました。松川家には、藩主が参加しての歌会が開かれたという逸話も残されています。

◆幕末の盛岡藩

幕末維新期の盛岡藩を牽引したのは14代藩主南部利剛でした。藩主となった利剛は、混乱する家中にありながら、^{ならやまさど ひがし}榎山佐渡や東次郎ら、若く才能ある人材を用い、切迫した藩財政の建て直しを図りました。

また、利剛は藩の教育振興にも力を注ぎました。明義堂を拡張して作人館と改称し教育体制を整備していますし、^{にっしんどう}日新堂開設の際には、建材の提供や助成金の交付などを行っています。

しかし、慶応4年(1868)に盛岡藩は戊辰戦争に敗れ、利剛は謹慎を命じられて東京へ護送されます。同年中には藩主の座を退き、嫡子^{としゆき}利恭に家督を譲りました。

◆揆奮場の設立と影響

揆奮場は、花巻城三の丸に東西60間(約108m)、南北30間(約54m)の敷地を有しており、文学教場には教室や大講堂が構えられていました。教科内容は、国学・漢学・数学・兵学などでした。また、武芸道場は堅土間づくりで、各流派の武芸師範が剣術・槍術・柔術・棒術などを教授しました。敷地内には、弓と銃的場、馬場、騎射場などが備えられ、弓術・砲術・馬術などの稽古が行えるようになっていました。教官には滋安をはじめとした花巻の武士たちがその任に当たっていました。

そのころの教科書類・書籍類は高価で盛岡・仙台・江戸などまで出かけなければ容易に入手できるもの



▲木製活字(個人蔵)

四書を作成するために揆奮場で使用されました。側面に「松川八左衛門、之を献ず」と書かれています。

ではありませんでした。教育振興のためには書籍の供給が必要と考えた滋安は四書用の木製活字を作らせ、揆奮場備え付けの教科書として印刷しました。

揆奮場から四書を供給されたため、花巻の地域においては庶民も四書を手にすることができました。

◆松川家文書について

現在、花巻市博物館には、約7000点にもものほる、主に近世から近代にかけての松川家に関わる資料が保管されています。これらの資料について、調査・研究が進められ、町の人々と共に歩んできた松川家の人たちの姿が明らかになってきました。その中でも、今回の展示では松川滋安の生涯をたどります。

(学芸員 小田桐睦弥)

■関連イベント

▽学芸員講座「松川家文書から見た松川滋安」

日 時：12月21日(土)13:30～

場 所：花巻市博物館 講座体験学習室

講 師：当館学芸員

〈申込不要・入場無料〉

▽ギャラリートーク

日 時：12月14日(土)13:30～

：1月11日(土)13:30～

場 所：花巻市博物館 企画展示室

解 説：当館学芸員

〈申込不要・要入館料〉

▽その他、共同企画展開催施設にてスタンプラリーを実施します。

花巻人形展—収蔵資料撰

期間：令和2年2月15日(土)～5月6日(水・振休)

花巻人形は、岩手県花巻で江戸時代後期から約200年以上の間、作り続けられてきた土人形です。京都の伏見人形と仙台の堤人形の流れを汲み、花巻で独自に発展しました。

東北地方には、各地に特色のある土人形がありますが、仙台の堤人形、米沢の相良人形とならび、「東北三大土人形」と称されています。

花巻市博物館には、現在約3500点、577種類以上の花巻人形を所蔵しています。数多くの花巻人形愛好者のおかげで、収蔵点数はますます増え続けています。

今回の展覧会では、博物館に所蔵している花巻人形の中から、多くの方々に見ていただきたい花巻人形を中心に選んでご紹介します。雛の節句からこどもの日まで、ゆったりと「愛で」(鑑賞し)て、心ゆくまで楽しんでいただければと考えています。

数ある花巻人形の中から、今回は「ねずみ大黒天」と「福祿寿」をご紹介します。

《ねずみ大黒天》

この花巻人形は、微笑む大黒天のお面をはずして、白いねずみが一息ついて休んでいるように見えます。そのぼんやりとした表情が、



▲ねずみ大黒天 (高11.8×幅10.6cm)

見る者の口角をふっとゆるませるような魅力を持っています。

花巻人形には、縁起物の人形がたくさんあります。中でも、大黒天は恵比寿とともに、数多く作られました。

豊穰と財福を司る大黒天は、大きな袋を担いで、米俵に乗り、打ち出の小槌を持つ姿を想像することが多いと思いますが、「ねずみ大黒天」は、大黒天の使いといわれる「ねずみ」が、大黒天と一体化して表現されているところが、とてもユニークです。

《福祿寿》

福祿寿は、健康長寿を司る神様です。

その姿は、背が低く、長い頭に長い白髭、巻物を結んだ杖を持ち、長寿のシンボルである鶴を伴って表現されることが多いです。

この「福祿寿」は、左手の杖は失われていますが、右手に不吉を払い幸福を招く団扇うちわを持つ形で作られています。また、長く白い髭は長寿の印であり、美しい髭であるとされているため、そのかたちを忠実・丁寧に表現しているところが、この人形の魅力をより高めています。

高さ約40センチメートルほどあるこの人形は、花巻人形の中でも最大級の大きさがあり、彩色や筆遣いも大変丁寧で、精巧に作られているところから、花巻人形の傑作のひとつに数えられています。

江戸時代に作られたこの人形、左足の一部が欠損していますが、そこには長いあいだ人々の生活の傍らに寄り添って、大切にされてきた様子を感じることができます。

庶民の暮らしに彩を添えてきた花巻人形。今年の春も、花巻市博物館へお越しいただき、花巻人形を「愛で」(鑑賞し)てください。



▲福祿寿 (高39.6×幅21.8cm)



▲男雛女雛対



▲鯛猫

(学芸員 岡本雅子)

■関連イベント

▽館長講座 - 3「花巻人形」(予定)

日 時: 3月14日(土) 13:30 ~

場 所: 花巻市博物館 講座体験学習室

※申込不要、聴講無料

▽ギャラリートーク

日 時: 2月22日(土) 13:30 ~

場 所: 花巻市博物館 企画展示室

※申込不要、要入館料

▽花巻人形絵付け体験

日 時: 3月22日(土) 13:30 ~

場 所: 花巻市博物館 講座体験学習室

定 員: 20名 ※要申込

料 金: 1,600円~

※人形の種類により変わります。

▽花巻人形イラスト塗り絵

花巻人形をもとにしたイラストの塗り絵コーナーを会期中随時、企画展示室に設置します。

※関連事業は予定です。今後変更されることもあります。

8月2日から9月10日まで開催した開館15周年特別展「発掘された日本列島2019」に関連したワークショップを、4つ開催しました。その4つのワークショップの様子を簡単に紹介します。

①ミニチュア土器づくり

日時：8月4日（日）13：30～15：00

参加者：15名

最初に、縄文時代の土器について列島展を見学して学習をしました。

次に講座・体験学習室に戻り、学芸員から作り方の説明を受け、早速とりかかりました。オープン粘土が乾きやすかったので、粘土が乾かないように必要な分だけを袋から出し、丁寧に粘土を積み上げたり伸ばしたりして、制作を進めていました。



②勾玉づくり

日時 8月11日（日）13:30～15:00

参加者 24名

夏休み中ということもあり、他県や花巻市外から参加する子どももいました。また、自分のために制作するという大人の方も多く、楽しんで取り組んでいました。



③琥珀玉づくり

日時：8月12日（月・振休）13:30～15:00

参加者：27人

琥珀玉は、みなさんご存じの通り、大昔のマツやスギなどから出た樹脂が地中に落ちて化石になったものです。硬いために、勾玉づくりよりも削るのに時間と力が必要です。今回は、8名の大人の方の他、19名の子どもたちが制作に取り組みました。



④プラ板キーホルダーづくり

日時：8月18日（日）

参加者：13名

参加人数は他のワークショップより少なかったものの、参加したどの方も真剣にプラ板に色塗りをしていました。色づかいがとても工夫されていて、すてきな作品がたくさんできあがりました。途中から飛び入りして参加し、遅く始まった家族の方もありましたが、最後にはしっかり仕上げ、喜んで帰っていかれました。



館長 コラム

きのこ形土製品と 朱入り土器

開館 15 周年を記念して実施された特別展『発掘された日本列島 2019』には、各時代とも大変興味深い資料が多く展示された。縄文時代の展示品の中に、青森県白神山地東麓縄文遺跡群の大川添(3)遺跡から出土した、きのこ形土製品で蓋をした朱入り土器がある。

朱は、本来硫化第二水銀(HgS)のことで自然界では辰砂として存在し、色調は黄色味をおびた明るい赤色を呈する赤色顔料である。古代に使われた赤色顔料には、朱の他にベンガラ(弁柄)と呼ばれる酸化第二鉄(Fe2O3、赤鉄鉱)や鉛丹(Pb3O4、四三酸化鉛)もあるが、これらの総称として朱と呼ぶこともある。朱入り土器の朱は、赤色顔料を指すものであろう。

赤色顔料は、縄文時代の儀礼や祭祀に用いられる土器や土偶、耳飾り等を赤く塗る塗料として使われるほかに埋葬施設に撒かれる場合もある。

きのこ形土製品は、東北地方北部を中心に東北・北海道の縄文時代中期後半から後期にみられる土製品で

あり、祭祀に使われたと考えられている。

大川添(3)遺跡出土の朱入りの土器は、鳥形を呈し、鳥形土器の一端は注口となっており、背の上面二か所に把手が剥がれた痕跡がある。全体の形は鳥に似ているが、把手付き注口土器とも言える。

2002年(平成14年)に発掘調査された石鳥谷町(現花巻市石鳥谷)の田屋遺跡において、把手付き注口土器が出土している。注ぎ口周辺に朱が付着していたとされる。また、この土器に接するようにして、きのこ形土製品が出土している。きのこ形土製品の笠の裏側と軸の先端部分に朱が付いていたというから、きのこ形土製品が朱入り注口土器の蓋の役目を果たしていたものであろう。

百キロ以上離れた二つの地域から、赤色顔料が入れられた把手付き注口土器が出土し、きのこ形土製品で注口部が塞がれていたという事象は、偶然ではなく明らかに縄文時代中期後半の東北地方北部の習俗を示す資料といえよう。縄文人の精神活動に由来する儀礼や祭祀の具体事例に迫る重要な資料である。今回特別展の展示で青森と岩手の二つの事例を並べて展示出来た意義は大きい。

(館長 高橋信雄)

行事予定

2020年3月
2019年12月

企画展示室

- 共同企画展 ぐるっと花巻・再発見!
「松川滋安と揆奮場」
会期: 12月7日(土)~2020年1月26日(日)
《関連イベント》
◇学芸員講座
「松川家文書にみる松川滋安」
日時: 12月21日(土) 13:30~
場所: 花巻市博物館 講座体験学習室
※申込不要、入場無料
◇ギャラリートーク「展示解説」
日時: 12月14日(土)
2020年1月11日(土)
両日ともに13:30~
場所: 花巻市博物館 企画展示室
※申込不要、要入館料
- テーマ展「花巻人形」
会期: 2月15日(土)~5月6日(水・振休)
《関連イベント》
◇ギャラリートーク「展示解説」
日時: 2月22日(土) 13:30~
場所: 花巻市博物館 企画展示室
※申込不要、要入館料

講座・ワークショップ

- ◇館長講座-3「花巻人形」(予定)
日時: 3月14日(土) 13:30~15:00
場所: 花巻市博物館 講座体験学習室
※申込不要・入場無料
 - ◇古文書講座
「はじめての古文書」全5回
日時: 12月15日(日)、22日(日)、
2020年1月5日(日)、12日(日)、19日(日)
全て13:30~15:00
場所: 花巻市博物館 講座体験学習室
定員: 15名 ※要申込
 - ワークショップ「花巻人形絵付け体験」
日時: 3月22日(日) 13:30~15:00
場所: 花巻市博物館 講座体験学習室
定員: 20名 ※要申込
費用: 1,600円~※人形の種類により変わります。
- ※内容に変更がある場合があります。

花巻市博物館

〒025-0014 岩手県花巻市高松 26-8-1
電話: 0198-32-1030 FAX: 0198-32-1050
開館時間: 午前8時30分から午後4時30分まで
休館日: 12月28日から1月1日まで

入館料	小学生・中学生	150(100)円
	高校生・学生	250(200)円
	一般	350(300)円

※()内は20名以上の団体割引料金
※割安な近隣4館共通券もあります。
※特別展示を行う場合、入館料を定める場合があります。

交通案内

- 東北新幹線
新花巻駅より車で3分
- 東北本線
花巻駅より車で約15分
- 釜石自動車道
花巻空港 I.C.より車で約5分
- バス
新花巻駅より約5分
岩手県交通 土沢線
イトーヨーカドー行
賢治記念館口下車



◇URL <http://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/501/hanamakisihakubutukan/>

花◊博 コレクション

Hanahaku collection

小野寺周徳「猛虎図」

鋭い眼光で睨み、たくましい足で歩く虎は、古来、旺盛な生命力であらゆる厄災を祓い守護するとあがめられてきました。

盛岡藩二代藩主、南部利直は、慶長19年（1614）大坂冬の陣の後に、大坂方の重臣 片桐且元かつもとの居城であった茨木城（現大阪府）の破却はきやくを命じられ、その任務報告のため駿府（静岡）の徳川家康を訪ねました。その際、労をねぎらった家康から、カンボジアより献上された雌雄2頭の虎の子を下賜されています（『内史略』）。虎は盛岡城内の檻で飼育されていましたが、檻から逃げ出し、多数の負傷者を出したため、やむなく射殺されてしまいました。

この作品は、墨の濃淡で縞模様を表現し、鋭い眼光と口、鋭い牙が彩色され、虎の迫力を強調させています。

現在、常設展示で紹介しています。

（学芸員 小原伸博）



材質形状 / 紙本着色，本紙 / 130.0 × 58.0cm
落款 / 野周徳寫，印章 / 野周徳印（白文印）